高齢者看護における学生が考える専門職連携のイメージについて

入江　多津子
了徳寺大学・健康科学部看護学科

要旨

【目的】看護学生が考える連携の概念と吉池らの連携の構成概念とを対比し，学生の看護における専門職連携の考え方の特徴について明らかにすることを目的とした.

【方法】A大学看護学科３年生82名の「専門職連携について」の課題レポートに記載された内容を分析した.分析方法はテキストマイニングソフトKH-coderを用いて関連語検索を行った.

【結果】各構成概念について述べられた学生の割合は①同一目的の一致：41.5%，②複数の主体と役割：96.3%，③役割と責任の相互確認：20.7%，④情報の共有：93.9%，⑤連続的な相互関係過程36.6%であった.特に,「連携」の最も大事な「同一目的の一致」を記載している学生は半数以下であり「同一目的の一致」の重要性についての認識が薄く, 今後意識的に教授していく必要性が示唆された.

【考察・結論】同一の目的の一致，役割と責任の相互確認，連続的な相互関係過程の３つの要素についての認識は薄く，今後の連携教育の中ではよりこの点を強調していく必要がある．一方，連携の弊害も忘れてはならない.

キーワード：　看護学生，専門職連携，情報の共有，連携教育

A study on the images of the multidisciplinary collaboration perceived by nursing students in gerontological nursing

Tazuko Irie
Department of Nursing, Faculty of Health science, Ryotokuji University

Abstract

Purpose：The purpose of this study was to identify the characteristics of the multidisciplinary nursing practice perceived by the nursing students. The study was carried out by comparing the ideas that the students had with the multidisciplinary collaboration model established by Yoshiike, et al.

Method：The 82 third-year nursing students at a university were assigned to write about “Multidisciplinary Collaboration.” The written assignments were collected for the analysis; then, the KH-coder, a text mining software, was utilized to search the relevant terms. Result：The analysis revealed the following five elements about the concept of the multidisciplinary collaboration model. The 41.5% of the students agreed with having the same purpose. The 96.3% of them believed the advantages of the multi-disciplinary approach and their professional responsibilities. The 20.7% of the students acknowledged keeping the mutual relationships of the respective roles and responsibilities. The 93.9% of them confirmed the importance of Information sharing. The 36.6% of the students recognized maintaining the continuous interactive relationships. Although having the “Agreement with

the same purpose" was the most crucial element in the collaboration, it was notable that less than a half of the students expressed its significance. The result suggested that the value of the importance might be emphasized in the future learning opportunities. Discussions & Conclusion：The students might have difficulties in understanding the concept. It might be essential that the students needed to be taught differently when the concept of the multidisciplinary collaboration was introduced. Especially, the "agreeing with the same purpose", "keeping the mutual relationships of the respective roles and responsibilities" and "continuing interactive relationships", these three elements might be required more creativity in teaching. At the same time, it was necessary to recognize that the multidisciplinary collaboration might not be always beneficial to the nursing practice.

Keywords: nursing students, multidisciplinary collaboration, information sharing, education on collaboration

Ⅰ．はじめに

令和２年度版高齢社会白書によると，すでに日本の高齢化率は28.4%に上昇した[1)]．今後も団塊の世代の高齢化の進展とともに，要介護高齢者の数はさらに増加し，高齢者が持つ其々のニーズも多様化するであろう.時代はもはや一人の支援者がすべての要介護高齢者支援を受け持つことは困難である.そのため，現代社会では多くの専門職の力が要請され，それぞれの専門性を背景に，より広く深く要介護高齢者支援を提供して行くシステムとなりつつある.

それゆえ高齢者の周囲には多くの支援者が存在する.様々な専門職がどのような連携の下に有機的な支援を展開していくのかについて，先人たちにより多くの研究がなされた.林[2)]による報告では「それぞれの職種における役割が明確になり，複数の職種の役割が重なる業務が連携のポイントになることが示された.しかし，各職種に求められる役割と現実の業務の間にはギャップがあることも示された.」と連携の実態が明らかになっている.

また，各職種との連携を保つために，連携教育について，米林[3)] は「医師をはじめとする保健・医療・福祉専門職の意識と行動を, 各専門職間の連携にふさわしい形に変えていくためには, 遠回りのようであってもやはり教育しかない」と論じている.しかし，看護教育において,看護学生が講義，演習，実習の学習過程を通し，どのように専門職連携を認識しているかについて，調査された文献はないのが現状であった.そもそも「連携」とは何か，多くの研究者たちの実態調査等の研究を通し，導き出された定義の内容について，柴田(田上)ら[4)]は，①情報の伝達方向，②業務分担，③個人の職業意識：施設ケアの実践を担う看護職・介護職における連携・協働に関する問題認識の異同を比較検討していた.また山中[5)]は連携について「異なった組織間で，いままでの臨時的なつながりを目的意識化し，定期的な会合にしていく.定期的な業務提携が生まれる.しかも，ここでは各職種によって個別に行われていたケアがチームワークとして再編成される.ケアの対象につながる職種間の常時の援助体制ができる.」と述べている.吾妻ら[6)]はチーム医療を実践している看護師が感じる連携・協働における困難について【職種を越えて連携・協働する】【組織からの支援を得る】【チーム内で自分の能力を発揮する】【医師と連携・協働する】【チームのモチベーションを高める】【適切な役割分担を行う】【チームで情報を共有する】の7カテゴリーが抽出された.」と述べている.吉池ら[7)]は連携の定義として「①同一目的の一致，②複数の主体と役割，③役割と責任の相互確認，④情報の共有，⑤連続的な相互関係過程，の５要素によって「連携」は構成される」と述べている.以上の文献から連携について概観すると，連携の捉え方は日本国内では統一されていないということが言える.

そこで，本研究の主題である高齢者看護における学生の連携のイメージを分析するにあたり，吉池らが

述べる連携の定義を使用した．吉池らの尺度は，保健・医療・福祉の観点から，連携をテーマとした研究に文献として参考・引用されている研究が多く見受けられた．根本[8]，岡田[9],らの研究においても，吉池らの連携の定義が引用されていた．そのため研究者は保健・医療・福祉の分野において，分析しやすい尺度であると判断し，吉池らの連携の構成概念に照らし，高齢者看護を学んだ学生はどのように，講義・演習・実習で学んだ連携をイメージしているかを分析した．学生が考える連携の概念と，吉池らの連携の構成概念とを対比させ，Ａ大学学生の連携のイメージの特徴について明らかにした.

また，WHOにより2010年に「専門職連携教育・実践の行動のためのフレームワーク」[10]が提示され，日本も専門職連携教育の重要性の認識の下に，連携教育・方法が開発，推進されている．Ａ大学健康科学部看護学科においても連携教育の重要性を鑑み，連携教育の必要・重要性の下に，講義・演習では勿論のこと，実習においても患者や利用者を取り巻く専門職との連携をとるため，連携教育を行っている.具体的には専門職連携を意図した実習におけるカンファレンスや，学生同士のグループワークなどを実施し，その学びの結果をレポートにまとめさせた.

今回取り上げた高齢者看護の単元（高齢者看護学実習）においては，学生全員が専門職連携の必要性をレポートで述べていた.しかし，学生が専門職連携に関してのイメージはその内容に相違があった.そのため，学生が専門職連携をどのようにイメージしているかを分析することにより，連携教育に生かすため本研究を実施した.

一方，連携教育を推進している他大学では，ＩＰＥ（専門職連携教育）を系統的に大学のカリキュラムの中の積極的に取り入れ，１～4年次の教育の中にＩＰＥで実施している大学も近年徐々に増加してきている.しかし，Ａ大学はＩＰＥという形での具体的教育は少なく，各教科担当者がその理念の下に各自に連携教育を実施している状況である.そこで，Ａ大学の学生の専門職連携の認識を明らかにすることは，現在看護教育が目指す幅広い看護の考えかた，教え方の広がりの必要性も要請され，レポート分析を行った.

Ⅱ．目的

学生はどのように，専門職連携を認識しているかを分析し，学生が考える連携の概念と，吉池らの連携の構成概念と対比をし，看護学生がイメージする専門職連携の考え方の特徴について明らかにし，実践的連携教育を模索することを目的とした.

Ⅲ．方法

１．用語の操作的定義

専門職連携：チームとして意思決定を行い，責任は全員で負う.情報がチームの中で共有され，仕事の重なりをもちながらも専門性を発揮することと定義する.[11]

共起ネットワーク：テキストの中で用いられた単語をノードとし，単語と単語の共起性をリンクとするネットワークのことを言う．[12] Jaccard 係数：リンクの強さのことを言う．[12]

２．調査対象者

Ａ大学看護学科３年生84名で，本研究に対し同意の得られた82名の学生（男性15名，女性67名）辞退者2名であった.

３．調査期間

平成29年2月17日～平成29年3月31日

４．調査方法・内容

学生の課題レポートに記載された内容，およびキーワードを中心に専門職連携に関する内容をまとめ，分析する.

５．分析方法

テキストマイニングソフトKH coderを用いて分析を行った.

Ⅳ．倫理的配慮

本研究は平成28年度Ａ大学倫理指針及び研究倫理委員会の承認を得て実施した.実施にあたり，審査結果（研静№623）を遵守した.本研究の発表に関連して，開示すべき利益相反関係にある企業等はない.

Ⅴ．結果

分析の対象となるレポートのテーマは「これからの高齢者看護に望まれる専門職連携のあり方」について，1600字程度で記載するものであった．　今回の調査は成績とは一切関係ないこと，自由意志の参加であることの保証を同意書に記載した．課題レポートを分析する中で，吉池らの構成概念に類似する用語を一つひとつ確認していった.そして，それらの用語がKH coderの分析においては，（55回以上）の用語の出現頻度に絞った.分析レベルは，Jaccard係数0.5以上である.

１．記述統計

サンプルサイズ　　82　件

文章数　　2222　語句

各単語のつながりを共起ネットワークで可視化した.（図1挿入）

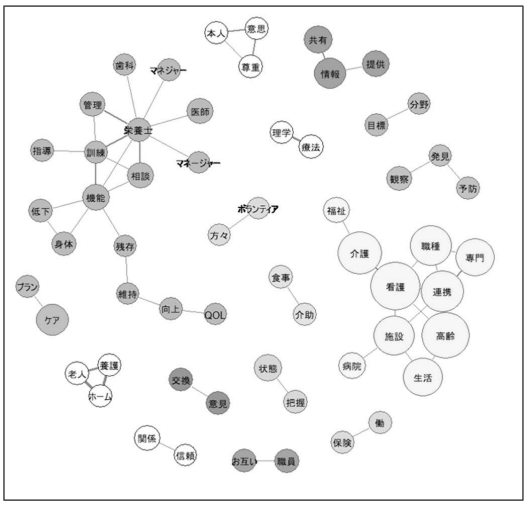

図１．共起ネットワーク

２．各定義の理解率と連携との関連

吉池らの「連携」の定義に対応するキーワードを次の操作で選んだ.

(1)　KH coderを用いて抽出語リストを作成し，このうちから各定義に関連するキーワードをすべて列挙した.

表1　各定義とキーワード

番号	各定義	キーワード	度数	割合
1	同一目的の一致	目的,目標	34	41.5%
2	複数の主体と役割	専門,役割,ネットワーク	79	96.3%
3	役割と責任の相互確認	分担,認識	17	20.7%
4	情報の共有	情報,共有,提供,伝達	77	93.9%
5	連続的な相互関係過程	協力,一緒	30	36.6%

(2)　(1)で列挙した抽出語を含む文章を「抽出語検索」で調べ，確かに各定義に対応した使われ方をしているかチェックした.

この結果，表1のような抽出語が確認できた.また，各定義にまつわる抽出語を述べている　学生の割合は，複数の主体と役割（専門，役割，ネットワーク）が96.3%と最も多く，次に情報の共有（情報，共有，提供，伝達）93.6％であった.(表1挿入)

表2 「連携」とのJaccard係数

順位	抽出語	全体	共起	Jaccard係数	該当する定義
1	職種	76	0.927	0.938	
2	専門	73	0.89	0.901	2.複数の主体と役割
3	ケア	71	0.866	0.877	
4	情報	69	0.841	0.852	4.情報の共有
5	共有	62	0.756	0.765	4.情報の共有
6	重要	62	0.756	0.546	
7	医療	60	0. 732	0.741	
8	それぞれ	59	0.72	0.741	
9	病院	59	0.72	0.728	
10	提供	56	0.683.	0.691	4.情報の共有
11	様々	51	0.622	0.63	
12	管理	49	0.598	0.605	
13	相談	48	0.585	0.593	
14	関わる	47	0.573	0.58	
15	栄養士	46	0,561	0.568	
16	医師	46	0.561	0.568	
17	視点	45	0.549	0.556	
18	学ぶ	45	0.549	0.556	
19	大切	44	0.537	0.543	
20	知識	43	0.524	0.531	
21	観察	42	0.512	0.519	
22	健康	41	0.5	0.506	
23	今後	41	0.5	0.506	

また，連携と関連するキーワードを「関連語検索」で調べた.

連携との関連が強い（Jaccard係数0.5以上）のキーワードは（表2挿入）の通りである.

連携の関連が強いのは,「職種」(0.938）が抽出され，次に多いのが「専門」(0.901)であった.

Ⅵ. 考察

WHOにより2010年に「専門職連携教育・実践の行動のためのフレームワーク」の提示は，大嶋[13] をはじめとする多くの研究者により，日本の連携教育に影響を与え，連携教育・方法の開発が推進された.A大学においても連携教育の重要性を鑑み「チーム医療の連携」という教科目が設定された.この状況を踏まえ，以下のことが考察された.

学生の連携の理解については吉池らの5要素がそれぞれ表現され，学生の全体での学びはなされていることが考えられた.しかし「連携」の最も大事な「同一目的の一致」を表現している学生は半数以下という結果であり，目的の重要性についての学生の表現がうまくなされておらず，今後意識的に教授していく必要性が示唆された.「複数の主体と役割」では専門，役割，ネットワークの認識といった単語が抽出され, 専門職種間の結びつきを意識していたことが読み取れた.一方, 多くの学生は「連携」を「情報の共有」と理解していることが推察され，今後は「情報の共有する」の目的，意義について，意識的に可視化が必要であろう.「役割と責任の相互確認」を述べた学生は20.7%と少なく,「連携」との強い関連を意識したものはなかった.学生は「役割と責任の相互確認」という面については，学習としての実習であり，そのため，役割と責任に実感がないのも無理からぬことであり，今後の「連携」に対する教授の工夫が求められよう.以上のことから，重要なことは，大学側の「連携」にたいする明確な教授目標が求められることである.

一方，連携の弊害として，山中14）はクライエントの立場から，①プライバシーの保護との葛藤，②援助の分断化，③援助の過剰な一体化，④援助関係の拡大による煩雑さを指摘している.学生のレポート分析からは，連携の弊害については述べられていないが，今後は連携の有効性と弊害についても，十分に教授していく必要があろう.

最後に，この研究の限界として，本研究は，Ａ大学の高齢者看護分野における専門職連携に関する分析であり，本研究をもって，Ａ大学全体の学生の専門職連携の在り方のという認識には当たらないことである.A大学の他学部・学科が専門職連携をどのように教授しているか，その情報の収集・分析はなされず，学生の「連携」「専門職連携」を含めた総合的連携の認識については，調査がなされていないという限界がある.

Ⅶ. 結論

分析の結果，同一の目的の一致，役割と責任の相互確認，連続的な相互関係過程の３つの要素についての認識は薄い傾向があった.これらのことは今後の連携教育の中に生かし，連携の目的の理解に努める必要があると考える.同時に，連携の弊害の教育も忘れてはならないということも示唆された.

引用文献

1) 厚生労働省,(2020),令和2年版高齢社会白書（全体版）（PDF版）, 高齢化の現状と将来像,https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf（2020.10.1　アクセス）

2) 林隆司,泉谷利彦,縄井清志（2010）介護老人保健施設における専門職の役割－リハビリテーション職・看護師・介護福祉士・ソーシャルワーカーの連携の視点から－．医療保健学研究,つくば国際大学紀要.1,41-54.
3) 米林喜男（2005）保健・医療・福祉専門職の現状と課題.　新潟医療福祉学会誌．4(2).3-14.
4) 柴田(田上)明日香,西田真寿美,浅井さおりほか（2003）高齢者の介護施設における看護職･介護職の連携･協働に関する認識.日本老年看護学会誌（老年看護学）.7(2),116-126.
5) 山中京子（2003）医療・保健・福祉領域における「連携」概念の検討と再構成.社會問題研究.53(1),1-22.
6) 吾妻智美,神谷美紀子他（2013）チーム医療を実践している看護師が感じる連携・共同の困難.甲南女子大学研究紀要.7，看護学・リハビリテーション学編,23-33.
7) 吉池毅志，栄セツコ（2010）保健医療福祉領域における「連携」の基本的概念整理　精神保健福祉実践における「連携」に着目して.桃山学院大学総合研究所紀要.34(3),109-122.
8) 根本治代（2010）障害者相談支援従事者が認識する専門職間連携の特徴. 学苑_人間社会学部紀要.832,96-106.
9) 岡田尚美（2015）母子の支援に携わる保健師および助産師の連携・協働に関する文献レビュー .北海道医療大学看護福祉学部学会誌.11（１）,77-83.
10) World Health Organization(WHO)（2010）Framework for action on interprofessional education & collaborative practice.（WHO.（2014）『専門職連携教育および連携医療のための行動の枠組みWorld』吉本尚, 竹村洋典監訳・監修. 三重大学,1-60.）
11) 吾妻智美,神谷美紀子他（2013）チーム医療を実践している看護師が感じる連携・共同の困難.甲南女子大学研究紀要.7,看護学・リハビリテーション学編,23-33.
12) 松村真宏・三浦麻子（2014）人文・社会科学のためのテキストマイニング,誠信書房,東京.128-129.
13) 大嶋伸雄（2009）連携教育の実践と課題,理学療法ジャーナル.43（12）, 1033-1041.

2021年２月５日　受理
了徳寺大学研究紀要　第15号